前坪古墳群

まえ　つぼ

－確認調査報告書－

1998

掛川市教育委員会

前坪古墳群

－確認調査報告書－

1998

掛川市教育委員会

例　言

1．本書は、平成８年度、平成９年度に実施した静岡県掛川市高御所に所在する前坪古墳群の確認調査報告書である。
2．調査は土地区画整理事業に先立つ緊急確認調査で、調査費用の１／２を国、１／４を県の補助金を受け掛川市教育委員会が実施した。
3．発掘調査に際しては、土地所有者の方々をはじめ周辺土地所有者の方々には多大なご理解とご協力を頂いた。
4．確認調査は、掛川市教育委員会の前田庄一が担当した。
5．調査の記録は、掛川市教育委員会が保管している。

凡　例

1．挿図における方位は、座標の北である。
2．本所で使用した遺構名称は次の意味である。
　ＳＤ：溝状遺構　　ＳＸ：性格不明な遺構
3．遺物の番号は、挿図と写真図版と同一である。

目　次

Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要 …… 2
　1．調査にいたる経緯と調査の目的 …… 2
　2．調査の方法と経過 …… 2
　3．古墳群をめぐる環境 …… 4
Ⅱ　調査の内容 …… 7
　1．３号墳の概要 …… 7
　2．２号墳の概要 …… 8
　3．４号墳の概要 …… 8
Ⅲ　まとめにかえて …… 11
附載　浅間神社古墳群３号墳 …… 12

挿　図　目　次

第１図　周辺古墳分布図 …… 1
第２図　前坪古墳群位置図 …… 3
第３図　３号墳墳丘測量図 …… 5
第４図　２号墳・４号墳トレンチ配置図 …… 9
第５図　２号墳検出礫実測図 ……10
第６図　出土遺物実測図 ……11
第７図　浅間神社古墳群３号墳墳丘測量図 ……13
第８図　浅間神社古墳群３号墳出土埴輪実測図 ……14

図　版　目　次

図版Ⅰ　上　確認調査地点遠景
　　下　３号墳近景
図版Ⅱ　上　３号墳後円部東側平坦面
　　下　３号墳前方部先端
図版Ⅲ　上　３号墳第２トレンチ内葺石
　　下　３号墳第６トレンチ内葺石
図版Ⅳ　上　３号墳第８トレンチ内葺石と段
　　下　３号墳出土遺物
図版Ⅴ　上　３号墳第１トレンチ内墳丘裾の葺石
　　下　３号墳第２トレンチ内葺石上の土器片
図版Ⅵ　上　３号墳第６トレンチ内葺石残存部分
　　下　３号墳第９トレンチ内前方部先端の葺石
図版Ⅶ　上　２号墳Ａトレンチ内敷石状遺構
　　下　２号墳Ｃトレンチ内方形周溝墓周溝
図版Ⅷ　上　４号墳Ａトレンチ全景
　　下　４号墳Ａトレンチ内ＳＤ03

1．前坪古墳群３号墳　2．吉岡大塚古墳　3．春林院古墳　4．東登口古墳群　5．行人塚古墳　6．瓢塚古墳
7．各和金塚古墳　8．永源寺古墳群　9．権現山古墳　10．宇佐八幡宮境内１号墳　11．石ノ形古墳　12．原川古墳
13．高代山古墳群　14．岡津原古墳群　15．若作古墳群　16．源ヶ谷古墳群　17．六ノ坪古墳群　18．不動ヶ谷古墳群
19．山麓古墳群　20．天王山古墳群

第１図　周辺古墳分布図

Ⅰ　発掘調査と遺跡の概要

１．調査にいたる経緯と調査の目的

市内高御所（こうごうしょ）地区は、丘陵があたかも指を広げたごとくに伸び、その指の間に谷が入り込む地形をしている。この丘陵の尾根上に古墳が点在することは、東名高速道路に伴う発掘調査や、昭和56年度から昭和58年度にかけて市内で実施した遺跡分布調査により明らかであった。高御所地区の東隣りの長谷（ながや）地区では、丘陵を削り谷を埋めての土地区画整理事業が現在進められている。この長谷土地区画整理事業に伴い掛川市教育委員会では、平成７年度から用地内の発掘調査を実施している。この発掘調査により、それまで知られていなかった古墳や横穴墓、集落などの存在が明らかとなった。長谷土地区画整理事業は高御所地区との境までが計画用地内であり、平成７年度には高御所に隣接する場所で前坪古墳群６号墳の発掘調査を実施した。この前坪６号墳の調査時に西に連なる丘陵を踏査したところ、今まで円墳と考えられていた前坪３号墳が前方後円墳である可能性が考えられた。

この３号墳周辺では、高御所本村地区土地区画整理事業の計画が立てられていたことから、市教育委員会では、平成８年１月18日に区画整理事業の担当課に前方後円墳らしい地形があると伝えた。そして、２月19日に長谷土地区画整理事業用地内の遺跡の取扱いについて協議した折りに、前坪３号墳の確認調査について協議し、これを実施する方向で合意した。そして平成８年度に、前坪３号墳が古墳であるかどうかを確認するための調査を実施した。

この確認調査により、前坪３号墳が古墳時代前期に位置づけられる前方後円墳であることが判明したことから、その西に位置する２号墳と東に位置する４号墳について、３号墳との関係を把握するための確認調査を平成９年度に実施するに至った。

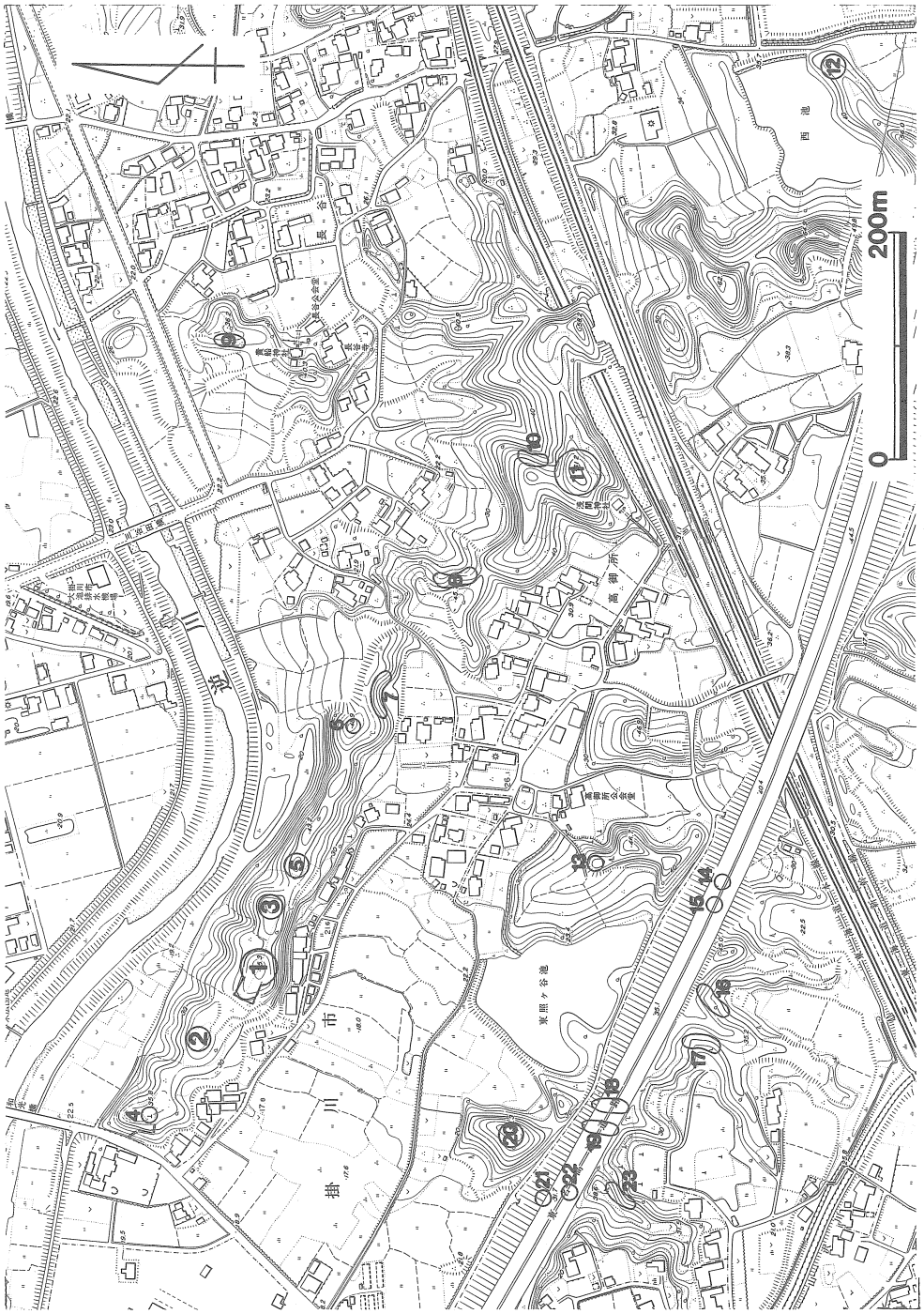
２．調査の方法と経過

３号墳は、前方部を北西に向ける前方後円墳であり、南半分が山林、北半分が茶畑となっていた。茶畑は、すでに人の手は加えられておらず、茶の木が大人の背丈以上に伸びていた。確認調査は、主として茶畑部分を対象として行うことにし、茶の木の伐採から着手した。茶の木を伐採したところで、前方後円の形が明瞭となったため、後円部と前方部に幅１ｍのトレンチを計９本設定し、人力で掘削した。各トレンチは、古墳であることを確認した段階で掘削を終了した。この３号墳の確認調査は、平成８年度に、トレンチ掘削とラジコンヘリコプターによる景観写真撮影を実施し、平成９年度にラジコンヘリコプター使用の空中写真による縮尺100分の１の墳丘測量図を作成した。

２号墳は全体が山林であり、樹木をそのまま残してトレンチを設定することとした。この２号墳の調査では、地山の礫を使用した葺石状のものが確認された時点で、また主体部状の掘り込みを確認した段階で調査を終了したために、掘り込みの規模等の確認までは至っていない。

４号墳は全域が茶畑であったが、北側半分の茶の木が伸び放題になっていたので、この部分にトレンチを設定し、茶の木の伐採後トレンチを掘削した。この４号墳の確認調査では、溝状遺構の規模を確認した段階で掘削を終了した。

そして、２号墳、３号墳、４号墳のトレンチを埋戻して確認調査を終了した。



1．前坪古墳群３号墳　2．前坪古墳群２号墳　3．前坪古墳群４号墳　4．前坪古墳群１号墳　5．前坪古墳群５号墳
6．前坪古墳群６号墳　7．本村横穴群E群　8．向山横穴群　9．山脇横穴群　10．前山横穴群　11．浅間古墳群３号墳
12．西池古墳　13．本村古墳群３号墳　14．東照ヶ谷古墳群２号墳　15．東照ヶ谷古墳群１号墳　16．本村横穴群D群
17．本村横穴群C群　18．本村横穴群B群　19．本村横穴群A群　20．天上塚古墳　21．本村古墳群２号墳
22．本村古墳群１号墳　23．屋敷越横穴群

第２図　前坪古墳群位置図

３．古墳群をめぐる環境

掛川市内の古墳・横穴墓の総数は約1400基と推定され、そのうちの約1200基が古墳時代後期の古墳や横穴墓である。横穴墓は推定1000基を数え、県内屈指の横穴墓分布地となっている。

市内には、小規模な古墳群は数多く存在するが、大規模な古墳群としては市の西端の２級河川原野谷川沿いの河岸段丘上につくられた古墳群があるにすぎない。この古墳群は、５世紀前半から５世紀末までの前方後円墳と円墳で構成され、北から、全長55mの前方後円墳である吉岡大塚古墳、直径30mの円墳の春林院古墳、全長43mの前方後円墳の行人塚古墳、全長63mの前方後円墳の瓢塚古墳、全長66mの前方後円墳の各和金塚古墳、袋井市域に入り全長35mの前方後円墳である権現山古墳、全長30mの前方後円墳である宇佐八幡宮境内１号墳、直径27mの円墳の石ノ形古墳、原野谷川左岸の円墳で、円筒埴輪、形象埴輪が出土した原川古墳等から成る。

原野谷川左岸の岡津原には画文帯神獣鏡が出土した奥ノ原古墳を始めとする岡津原古墳群、この岡津原古墳群の北東に全長29mの前方後円墳１基を含む高代山古墳群がある。小笠山の北麓に分布する若作古墳群は、５世紀後半から６世紀前半にかけて造られた円墳から成る古墳群である。源ヶ谷古墳群は、方墳１基、円墳６基を調査し、時期は５世紀中ごろから６世紀前半に位置づけられる。六ノ坪古墳群は、３基の円墳を調査し、６世紀前半に位置づけられる。不動ヶ谷古墳群は、５世紀後半から６世紀初頭に位置づけられる円墳６基を調査した。天王山古墳群は、前方後円墳１基を含む古墳群で、５世紀から６世紀初頭の古墳群と推定される。

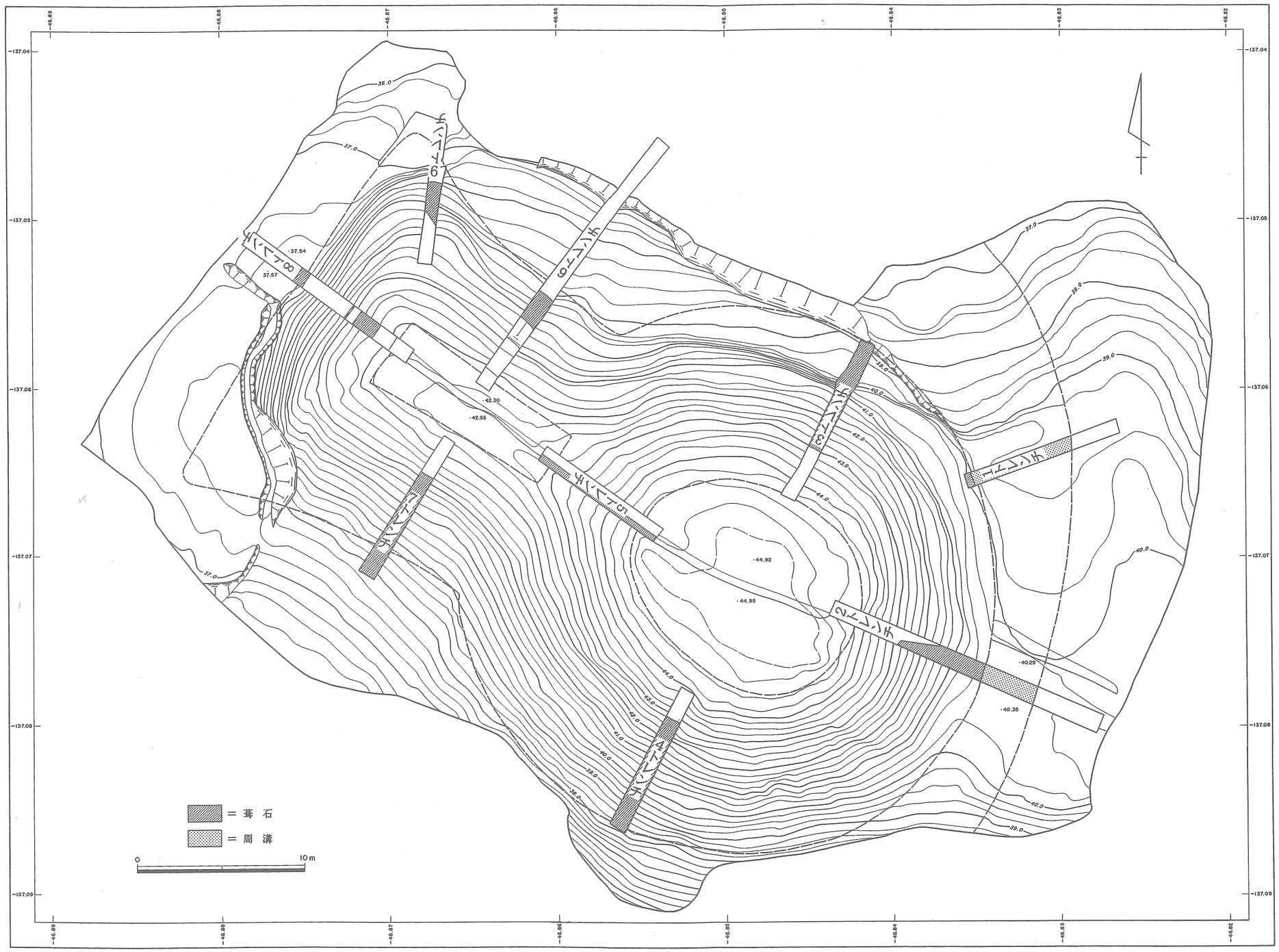
前坪古墳群の近辺では、円墳と横穴墓の分布が知られている。

前坪古墳群の南の丘陵には、円墳と横穴墓が分布し、円墳では、本村古墳群１号墳、２号墳、東照ヶ谷古墳群１号墳、２号墳が東名高速道路建設に伴い調査された。これらの古墳は、直径10m前後の規模で、５世紀末から６世紀初頭に位置づけられる。このほかの古墳では、天上塚古墳が未調査であるが、直径20m前後の円墳と推定される。そして、この丘陵の斜面には６世紀中ごろから７世紀後半に造られた横穴墓群が分布している。

前坪古墳群が存在する丘陵の東端では、長谷土地区画整理事業に伴い、前坪６号墳、浅間神社古墳群３号墳、西池古墳の各古墳と、本村横穴墓群Ｅ群３基、向山横穴墓群３基、前山横穴墓群４基、山脇横穴墓群３基が調査されている。前坪６号墳は、墳丘基底の盛り土の検出と須恵器片の出土をみたが、後世の改変により規模等は明らかではない。浅間神社古墳群３号墳は、調査前３基から成る古墳群のうちの１基と考えられていたが、調査の結果、１号墳、２号墳が古墳でなかったため、単独１基の古墳であることが判明した。西池古墳は、直径20m、高さ 2.5mの円墳で、主体部は、割竹形木棺１基、箱形木棺３基の計４基が墳頂部いっぱいに造られていた。割竹形木棺の主体部からは、底面に円礫が詰められた排水溝が墳丘外までのびていた。古墳の時期は、５世紀後半から５世紀末ごろと考えられる。

横穴墓群のうち、向山横穴墓群からは、須恵器田辺編年のＭＴ15型式に位置づけられる須恵器が出土していて、県内はもとより東日本最古の横穴墓群である。前山横穴墓群からは、ＴＫ10型式の須恵器が出土している。向山横穴墓群、前山横穴墓群は、羨門部の閉塞に礫は使用されず、羨門部に幅10cm程度の溝が掘り込まれていることから木を閉塞に使用したものと考えられる。

前坪古墳群を形成する古墳のうち１号墳については、推定地の半分が墓地のために削られていて、削られた断面では盛り土や主体部等は確認できない。５号墳については、直径20m前後の円墳と考えられるが、墳頂部の４分の３がすでに削られている。この削られた断面では遺構等は確認できない。



第３図　３号墳墳丘測量図

Ⅱ　調査の内容

1．３号墳の概要

３号墳は、丘陵の先端から200mほどの位置に造られた前方後円墳である。後円部墳頂の標高約45m、水田面との比高差約27mを測る。古墳の南半分は山林、北半分は茶畑となっていた。

前方部の南側から先端、そして古墳の北側から後円部の東側にかけて平坦面があり、茶畑となっていた。後円部の東側の茶畑の高さは、前方部西側の茶畑より約 2.8m高くなっている。

墳丘は、原形をよくとどめていたが、後円部北側裾と、前方部の両端が畑の開墾により削り取られていた。また、墳丘南半のくびれ部から前方部にかけては農業の利用により若干削られていた。

３号墳の確認調査は、古墳であるかどうか確認するための調査であり、幅１mのトレンチを設定して、掘削した。墳丘測量は、現況の測量であるため、等高線は25cm間隔で、縮尺100分の１で作図した。

第１トレンチ

地山の礫を使用した葺石と古墳の裾、古墳の裾から続く黒色土を確認した。黒色土は、幅約６mを測る。古墳とは反対側の壁が垂直に立ち上がるのが気になるが、ここでは周溝と考えておく。

第２トレンチ

墳丘斜面において地山の礫を使用した葺石を確認した。葺石は、墳頂部から約2.6m下がったところから裾にかけて検出した。葺石のない部分は、茶畑の耕作の時に邪魔になるためにはずしたものと考えられる。第２トレンチで検出された周溝と考えられる黒色土は、幅約３m、深さ約25cmであった。墳丘裾のレベルは、第１トレンチで確認した裾のレベルより約60cm高くなっている。

第３トレンチ

検出された葺石のうち裾に近い部分は残存していたが、墳丘のものは原位置から動いていた。

第４トレンチ・第７トレンチ

葺石が崩れた状態で検出された。古墳の裾は確認していない。

第５トレンチ

10cm程度の礫が散在する。敷き詰めるという状況ではない。

第６トレンチ

前方部頂から約 1.9m下がった標高40.7m付近で幅約80cmの段のような平坦面を検出した。そして、この段状の平坦面から下で葺石を検出した。葺石は、25cm前後の大きさの地山の礫が使用されているが、その中に１点長さ約60cmの河原石が用いられていた。

第８トレンチ

前方部頂から約90cm下がった標高41.7m付近から葺石を検出し、標高40.20m付近で幅約60cmの段を検出した。段から裾までの間の葺石はほとんどが畑の開墾の時にはずされていた。この葺石のはずされた部分で、盛り土である黒色土と黄褐色土の互層を確認した。

第９トレンチ

前方部北側先端部分に設定したトレンチで、標高39m付近から下に葺石が残存していた。墳丘裾の葺石は畑の開墾時に抜き取られていた。

後円部東側裾から後円部墳頂までの高さ5.2m、後円部墳頂と前方部頂の比高差2.5mを測る。古墳がのる基盤層が後円部方向から前方部方向に傾くために、前方部は裾から頂までの高さ５mを測る。

２．２号墳の概要

２号墳は、３号墳の西約90mに位置し、最高所の標高約39.3mを測る。直径約20m、高さ約２mの円墳状を呈するが、頂上付近から北を畑の開墾により削り取られている。

Ａトレンチ

表土直下から数cmの大きさの礫が敷きつめられたような状態で検出された。礫の実測後、トレンチの北半分を掘り下げたところ、礫の下から第６図－４の須恵器坏身もしくは有蓋高坏の坏部と思われる個体、さらに同様の個体片１点、器種不明の須恵器口縁部破片が出土した。

Ａトレンチと南北方向のＢトレンチが交差する頂上部において、性格不明な遺構ＳＸ01を検出した。ＳＸ01は、地山である茶褐色土を掘り込んだ遺構で、東西方向か南北方向に主軸を向ける遺構である。遺構の規模を確認するところまで調査はしていないが、東西方向に３m以上の長さを有する。

Ｂトレンチ

斜面から地山の礫を用いた葺石状の遺構が検出された。葺石と呼ぶにはあまりにまばらであるが、15cmから25cmの礫が使われていた。Ａトレンチで検出した敷石状の礫とは明らかに大きさが異なる。この葺石状の礫を実測後、トレンチの東半分を掘り下げたところ、トレンチの北半分からは黒色土があらわれ、部分的にではあるが黒色土中に厚さ約10cmの黄褐色土の盛り土が見られた。

Ｃトレンチ

斜面から東側の平坦面にかけて設定したトレンチで、Ｂトレンチ同様、斜面では15cmから25cm程度の礫が散在している状況が見られた。礫の実測後に北半分を掘り下げたところ、礫の下約20cmのところで地山に達した。

東側の平坦面では、表土下に黒色土が厚く堆積していた。この黒色土を除去したところ、溝状遺構と考えられるＳＤ01、ＳＤ02を検出した。ＳＤ01の西側の肩は黒色土を掘り下げていないために検出していない。このＳＤ01、ＳＤ02は、直角に配される溝である可能性が高く、性格としては方形周溝墓の周溝の可能性が高い。ＳＤ02の確認面の幅約１mを測る。

３．４号墳の概要

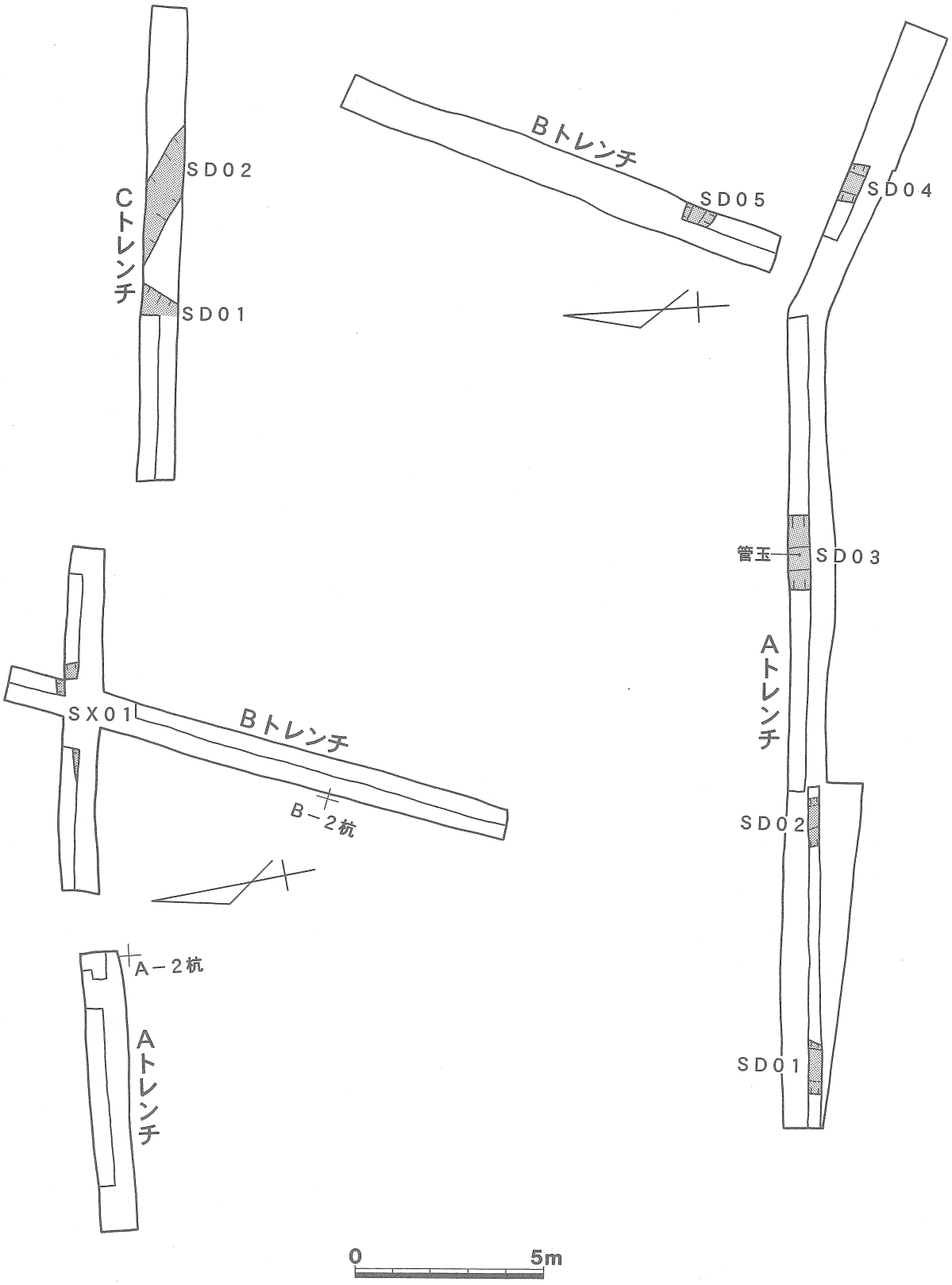
４号墳は、３号墳の東約50mに位置し、最高所の標高約44.5mを測る。小高くなっている程度であったが、頂上付近から北と東を畑の開墾により削り取られている。

Ａトレンチ

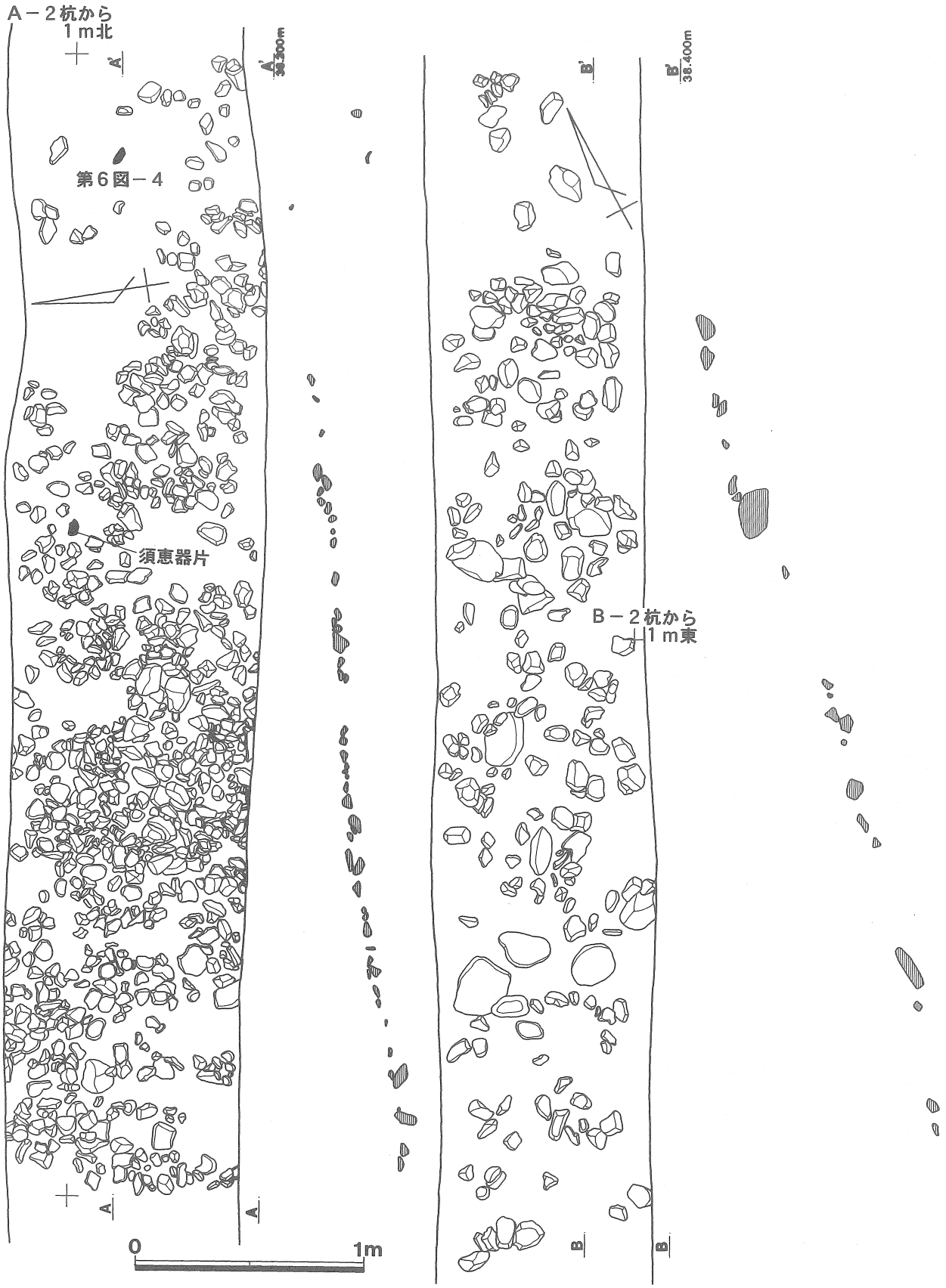
頂上の平坦面の東端、頂上から西に下がった傾斜から平坦面に移行する場所、そして西端の平坦面から合計４本の溝状と考えられる遺構を検出した。ＳＤ01、ＳＤ02は、２号墳のＢトレンチ同様地山の円礫の散布が見られ、その下から検出したもので、黒色土を覆土とする。ＳＤ01、ＳＤ02間は、約５mを測る。ＳＤ03は、幅約 1.7mを測る。掘削途中で緑色凝灰岩製の管玉が出土したために、掘削を中止した。管玉検出面までの深さ約90cmを測る。管玉とともに土師器の小片が出土した。ＳＤ04は、幅約 1.2m、深さ約70cmを測り、覆土中から弥生土器と思われる小片が出土した。

Ｂトレンチ

頂上平坦面の北端において溝状遺構ＳＤ05を検出した。溝は、茶畑の耕作で削平を受けていて、底面近くが残存していたにすぎず、幅約90cm、深さ約25cmを確認した。底面のレベルは、ＳＤ04より約30cm高くなっている。



第４図　２号墳・４号墳トレンチ配置図



第5図　2号墳検出礫実測図

Ⅲまとめにかえて

３号墳の各トレンチからは、土師器壺の破片が少量出土している。第６図－１は、第８トレンチ内前方部先端の西側から出土した土師器壺の口縁部破片で、外面に縦ハケを施し、内面の下半に斜めハケ、上半に横ハケを施す。外面に赤彩がかすかに残る。２は、第８トレンチ内の前方部の段から出土した土師器壺の口縁部破片で、器表の剥落により調整は不明であるが、外面に指による押圧の痕跡が残る。小破片のため、径は不明である。３は、第２トレンチ内後円部の葺石上から出土した土師器壺の底部破片である。

３号墳から出土した土師器壺は、古墳時代前期に位置づけられる。３号墳の次に築造されたと考えられる浅間神社古墳群３号墳が５世紀初頭に位置づけられることからも、前坪３号墳の築造時期を４世紀の後半から末に位置づけることができる。

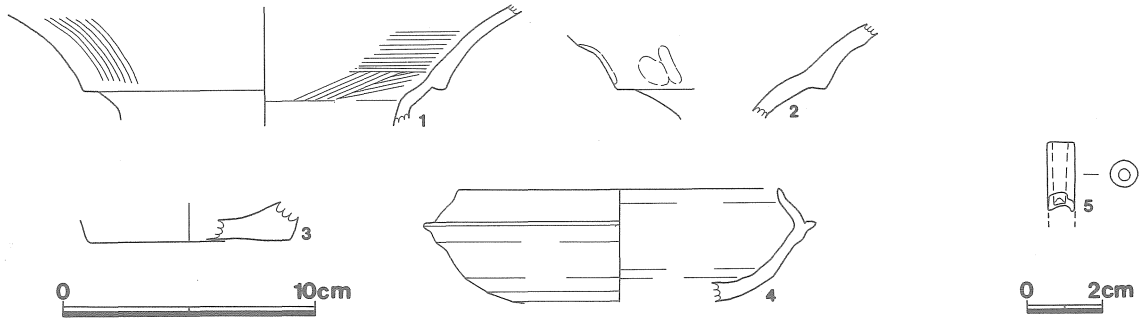
今回の測量調査による３号墳の規模は、全長47m、後円部の径29.5m、後円部の高さ5.2m、前方部の長さ17.5m、前方部の幅推定で25mである。

今まで、掛川市内の古墳は５世紀前半の各和金塚古墳から始まると考えられていて、県内の他の地域に比べて半世紀ほど古墳の築造が遅れるとされていたのが、古墳時代前期に位置づけられる前坪３号墳の確認により、市内でも県内の他の地域同様、４世紀代から古墳の築造が始まったことが証明された。

２号墳では、敷石状の遺構の下から第６図－４の須恵器が出土している。このことから６世紀代に何らかの形で使用されたことがうかがえる。頂上から検出されたＳＸ01は主体部の可能性が高く、斜面から盛り土が検出されていることから古墳の可能性が高いが、時期は今のところ断定できない。また、弥生時代の方形周溝墓の存在も明らかとなった。

４号墳からは、弥生時代中期の土器片、土師器片と緑色凝灰岩製管玉の出土により、弥生時代中期と古墳時代に使用されたことが明らかであり、溝状遺構の存在から、方形周溝墓の可能性が考えられる。

今回の２号墳から４号墳までの確認調査による弥生時代中期の方形周溝墓の推定と、古墳時代前期の前方後円墳の確認は、長谷土地区画整理事業用地内の前坪古墳群と同一丘陵における弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代後期の土坑墓、古墳時代中期初頭の浅間神社古墳群３号墳の確認と合わせて考えると、この丘陵上が弥生時代中期から古墳時代中期初頭に至る墓・塚が連綿と造られた墓域であったことを示すものであり、貴重な遺跡であることが明らかとなった。



１～３＝３号墳　４＝２号墳　５＝４号墳

第６図　出土遺物実測図

浅間神社古墳群３号墳

浅間神社古墳群は、調査前は３基から成る古墳群と考えられていたが、調査により単独１基の古墳であると判明した。この古墳は、前坪３号墳と同一丘陵上、約500m南東に位置する。前坪３号墳とこの浅間神社古墳群３号墳との間には、前坪５号墳、前坪６号墳が存在するが、この２基の古墳は大きくても直径20m程度の円墳と考えられ、前坪３号墳に匹敵する古墳は浅間神社古墳群３号墳である。墳頂の標高58.9mを測り、前坪３号墳より14mほど高い所に造られている。

古墳は地山を削り出して造られていて、盛り土は、傾斜している墳頂部を平らに整えるために使用されているにすぎない。葺石は存在しない。

墳頂の南端の一部と墳丘の４分の１弱を茶畑の造成のために削り取られている。

古墳の北端には、底面の幅2.3～2.4m、深さ80cmの丘尾切断の溝がある。

墳頂の平坦面は、東西11m、南北10mの規模である。墳頂の大部分は後世に削平を受けているが、残存している北端の縁辺からは埴輪の底部が並んで出土していることから、本来は墳頂部の縁辺に埴輪が並べられていたものと推定される。古墳は、東西37.5m、南北41.5mを測る円墳である。古墳の裾の標高は東側が53.9m、西側が51.6m、南側が51.7m、北側が51.5mであり、東側は西側、南側、北側に比べ約2､3m高くなり、墳頂までの高さは、東側で５m、西側、南側、北側で 7.3mを測る。墳丘の南斜面と北斜面にはテラスがある。南斜面のテラスは、標高53.5mから53.7mあたりに80cmから１mの幅で、南斜面のテラスは、海抜53.6mから53.8m付近に70cmから１mの幅で削り出されている。西側の裾には、幅約２mの平坦面が削り出されている。

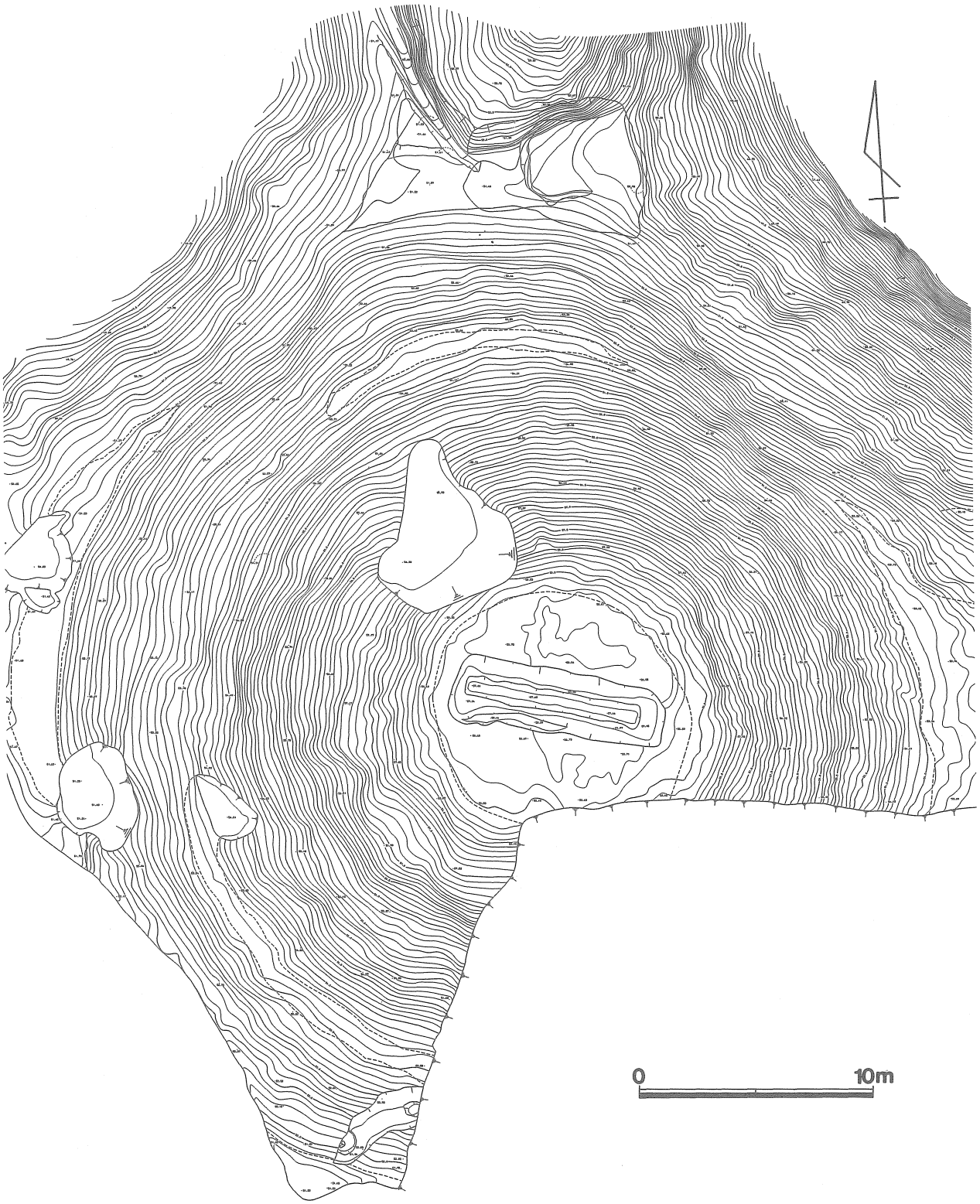
東側の墳丘裾には、１m～1.15mの間隔で４個体の埴輪底部が並んでいた。このほかに朝顔形円筒埴輪片、円筒埴輪片が、南側裾、西側裾、北側テラス、北側丘尾切断の溝内から出土しているが、原位置を留めるものはない。また、水鳥の可能性のある形象埴輪の破片が丘尾切断の溝の東端から出土している。

主体部は、墳頂部の中央に納められた割竹形木棺である。掘り方は２段に掘られていて、上段の掘り方が幅 2.5m、長さ9.1m、下段の掘り方の幅は、西端で85cm、東端で95cm、長さ 7.5mを測る。確認面から墓坑底面までの深さ約1.1mを測る。墓坑の底面は水平に掘られていて、排水溝はない。棺の被覆に粘土は全く使用されていない。

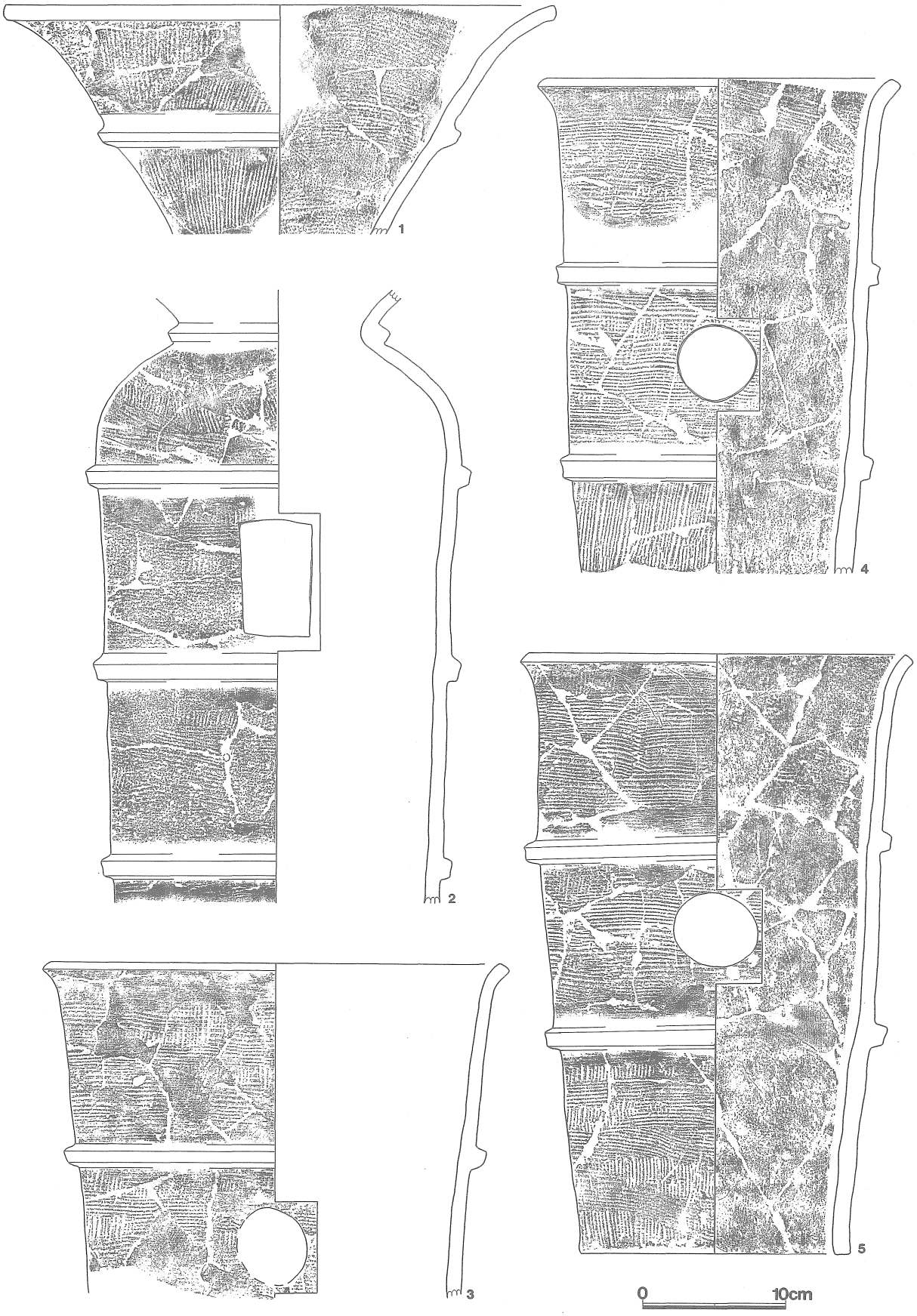
この墓坑内から、鉄剣１、鉄鏃30、刀子２、鉄斧７、ヤリガンナ５、鉄鎌３、鉄鍬先２、鉄釣り針３などが検出された。これらの鉄製品は、墓坑内の中央から東で出土した。

遺物は、墓坑内から上記の鉄製品のほかに、南側テラスから土師器壺が出土した。

第８図－１は、北側テラス上方から出土した朝顔形円筒埴輪の口縁部破片で、口径39.0cmを測る。外面の調整は、縦ハケ、内面に横ハケを施す。２は、北側テラス上方から出土した朝顔形円筒埴輪の円筒部で、基部を欠損する。３段目に長方形の透かしが２方向にあく。外面の調整は、横ハケが施される。肩の部分には縦ハケが残る。３は、西側裾から出土した円筒形埴輪で、口径32.8cmを測り、図示した４、５より一回り大きい。透かしは円孔で２方向、外面に横ハケを施す。内面はナデ仕上げとなる。４は、北側裾より出土した円筒埴輪で、口径25.2cmを測る。外面の基部は縦ハケ、２段目に横ハケ、３段目に横ハケを施す。内面はナデ仕上げであるが、口縁部付近に横ハケが残る。５は、西側裾より出土した円筒埴輪で、口径27.6cm、底部径18.8cm、高さ42.2cmを測る。２段目に円孔を２方向にあける。外面は横ハケ、内面はナデ仕上げで口縁部下に横ハケをわずかに残す。



第７図　浅間神社古墳群３号墳墳丘測量図



第８図　浅間神社古墳群３号墳出土埴輪実測図

図　　版

図版Ⅰ

確認調査地点遠景

3号墳近景

図版Ⅱ

3号墳　後円部東側平坦面

3号墳　前方部先端

図版Ⅲ

3号墳　第2トレンチ内葺石

3号墳　第6トレンチ内葺石

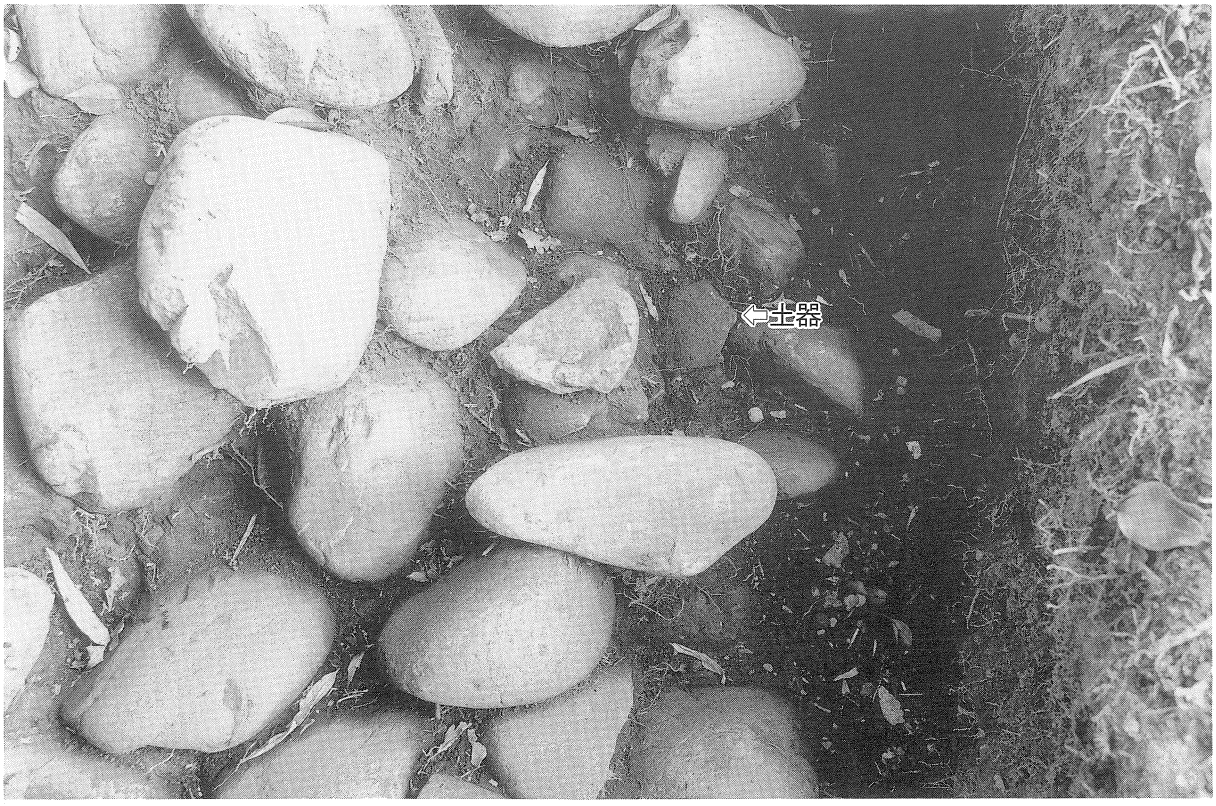
図版Ⅳ

3号墳　第8トレンチ内葺石と段

3号墳　出土遺物

図版V

3号墳　第1トレンチ内墳丘裾の葺石



3号墳　第2トレンチ内葺石上の土器片

図版Ⅵ

3号墳　第6トレンチ内葺石残存部分

3号墳　第9トレンチ内前方部先端の葺石

図版Ⅶ

２号墳　Ａトレンチ内敷石状遺構

２号墳　Ｃトレンチ内方形周溝墓周溝

図版Ⅷ

4号墳　Aトレンチ全景

4号墳　Aトレンチ内SD03

報告書抄録

ふりがな	まえつぼこふんぐん
書名	前坪古墳群
副書名	確認調査報告書
編著者名	前田庄一
編集機関	掛川市教育委員会
所在地	〒436-8650 掛川市長谷701-1
発行年月日	平成9年3月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まえつぼこふんぐん 前坪古墳群	しずおかけんかけがわし 静岡県掛川市 こうごうしょ 高御所1446-1外	22213	63-2～4	34度 46分 29秒	135度 58分 08秒	19961001 19980325	1,700 ㎡	区画整理事業

所集遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前坪古墳群	古墳	古墳時代	古墳	土師器	

前坪古墳群
確認調査報告書

平成10年3月25日

編集発行　掛川市教育委員会
静岡県掛川市長谷701-1
TEL (0537)21-1158

印刷　株式会社 彩光堂
静岡県掛川市宮脇248-1
TEL (0537)24-0013